

社会現象とも言われたNHK朝の連続テレビ小説「あまちゃん」が終わり、物足りない朝を迎えている方も少なくないのではないだろうか。よく指摘されてきたように、あの番組が持つ面白さは「これでいいんだ」という現実肯定の徹底ぶりだ。脚本家・宮藤官九郎さんが、朝日新聞のインタビューでこんな話をしていた。

「言おうとしたことは（中略）田舎の人は自分の住む場所のネガティブなところばかり言うけれど、主人公のアキからみたら全部新鮮に見える。そういうモノの見方っていうのかな」

「みんなそっちばかりを見ているけれど、ここにこんなに面白いモノがありますよ」みたいなこと。（中略）自慢できる人がもつといればいいのと思います」

同じ言葉を別の人から聞いたら、響かなかったかもしれない。しかし、あのドラマを思い浮かべれば、さりげない話なのに、じんわりと説得力を持っていることに気付く。

田舎、過疎、方言……。そんな地味なキーワードが明るく、好意的なイメージで受け止められた。今の日本人の心の奥底には、そこに反応する何かがある。

それなのに、と言いたくなる。今の政治から、「地方」のにおいを感じ取るのは極めて難しい。宮藤さんのようなストレートだけれども、とても大切なことを、実感持っ

底の方でうごめくもの

て語れる政治家が消えた。地域を守ろうとする人たちの情熱をすくい取る動きも鈍い。「自治」や「分権」といった言葉が使われる量も、めっきり減ったように感じる。

試しに、北海道新聞の記事データベースで調べてもらった。昨年一年間で「自治」という語句が使われた記事は六千二百一十件。ところが、その八年前の二〇〇四年には、二千五百件以上も多い八千五百三十八件の掲載があった。

「分権」に至っては、〇四年が三百九十六件だったのに対し、昨年は四分の一の九十八件しかない（〇四年と比べたのは、統一地方選の三年前という条件をそろえるため）。

新聞は社会を映す鏡だ。地方をないがしろにしている——とまでは言わないが、たった八年で変わった時代の空気感にあらためて驚く。

世の中の底流にあり、静かに求め続けられている。でも、なかなか政治的な論争の中心にならない。そんなテーマが増えている。

もう一つ、象徴的なのが原発問題だろう。福島第一原発事故を経て、この国は一度は「原発ゼロ」社会を目指した。しかし、今の安倍政権は事故の教訓を忘れたかのようになり、この目標を捨て去り、原発の輸出や再稼働に前のめりになっている。政権の高支持率を横目に、首をかき上げている人は多い

のではないだろうか。

そんな胸の奥にくすぶるモヤモヤをわしづかみにし、すっきりと言葉に出してくれたのが小泉純一郎元首相だ。

「放射性廃棄物の最終処分があてもなく、原発を進めるのは無責任だ。原発ほどコストの高いものはない。日本は原発ゼロでも十分やっていける」。小泉氏はこう言って、政府・自民党が原発ゼロ方針を打ち出すよう公然と訴えた。

小泉氏は昔から、短い言葉で物事の本質を突くのがうまい。「王様は裸だ」と、恐れずに言えるのが真骨頂だ。拍手を送った人も多かったのではないか。ただ、それも小さなさざ波で終わり、政界の論争にまでは広がらなかった。

安倍晋三首相が東京五輪の招致演説で、福島原発の汚染水問題について「状況はコントロールされている」と発言したことに「えつ」と、戸惑った人は多いに違いない。十月初めの朝日新聞の世論調査によると、発言に対して「そうは思わない」と答えた人は七六%に上ったそうだ。

回復基調にある経済への期待、政治が安定していることへの安堵感、七年後の東京五輪に向けたときめき……。そんなプラス志向の心地よさが、人々の腹の底でざらつく違和感の存在を忘れさせている。しかし、それは時折うごめき、いらだち、消えることはない。

八由V